様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０２１６

研究課題名（和文）日英語結果指向構文にみる情意的意味発生メカニズムの分析とその慣習化プロセスの特定

研究課題名（英文）An Analysis of the Mechanism of Generating the Affective Meaning and an Identification of their Conventionalization Processes on the Result-oriented Constructions in English and Japanese

研究代表者
田村　敏広（Tamura, Toshihiro）

静岡大学・情報学研究科・准教授

研究者番号：９０５４７００１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日英語の「てしまう」構文（例. 忘れてしまった）とGet受動文（例.Our grant got cancelled.）を対象に、それらに表現形式に観察される話者の感情（情意的意味）がどのように含意されうるのか、そのプロセスを探った。両構文には結果に焦点を当てるという特性があり、この特性がゆえに、記述される自体はもう取り返すことができないという不可逆性をもつことになる。この不可逆性こそが両構文における情意的意味の発生の基盤となっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research dealt with the te-shimau construction in Japanese (e.g. Wasurete shimatta.) and the Get-passive in English (e.g. Our grant got cancelled.), and clarified the process of how the affective meaning rises in the both constructions. They both focus strongly on the resultant state of the event, which results in implying irreversibility that means the event has already happened and finished. This research concluded that it is the irreversibility that motivates the generation of the affective meaning of the both constructions.

研究分野：言語学

キーワード：不可逆性　結果指向性　情意的意味

１．研究開始当初の背景
構文における話者の感情表出は語用論的に発生するものであり、構文の意味それ自体に根ざしたものであると考える見方はほとんどなかった。

しかし、英語の Get 受動文や日本語の「てしまう」構文という一見全く無関係の構文形式に、話者の非難や後悔、予想外の驚きなど、同じような感情表出がなされることが明らかになっている（e.g. Lakoff 1971; Chappell 1980; 森田 1989; 岩澤 2001 など）。

加えて、両構文形式が類似した意味をもつことも興味深いと言える。Gronemeyer(1999) は、Get 受動文が状態変化によって生じた結果状態を記述する構文であることを論じている。また、本申請者自身も、2007 年の研究論文において、「てしまう」構文が事態の結果状態に焦点を当てる形式であると主張している。

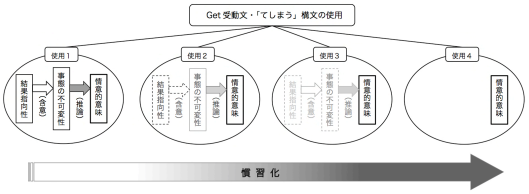
このような事実を踏まえ、両構文が類似した話者の感情（本研究では情意的意味と呼ぶ）を表出することは決して偶然ではなく、類似した意味、すなわち結果指向性という構文自体の意味に強く動機づけられているのではないかという仮説の設定に至った。

２．研究の目的
日英語における結果指向構文を対象に、以下の 2 点を究明することを目的とする。具体的には、英語の Get 受動文（例：Our grant got cancelled!）、日本語の「てしまう」構文（例：今日も忘れてしまった）という、日英語の構文を分析対象とする。これら二つの構文の間には形式的類似性は存在しないにもかかわらず、両構文が話者の非難や後悔、予想外の驚きなどといった情意的意味を伴う。

(1) 情意的意味の発生メカニズム：結構指向構文にみられる話者の感情表出を表す情意的意味が、構文形式のどのような意味機能を基盤として生じるものなのか、また、どのようなメカニズムによって生じるものなのかを共時的観点から明らかにする。

(2) 情意的意味の慣習化プロセスの特定：結果指向構文にみられる情意的意味が、どのようにして構文の意味に組み込まれ定着していくという「慣習化」の過程を通時的観点から明らかにする。

なお、以下の図は本研究で想定される、両構文の情意的意味の発生メカニズムと慣習化プロセスの仮定図である。



図では、大きく２つの作用が想定されている。ひとつは情意的意味の発生メカニズムである。先行研究で得られた知見から、構文の結果指向性は「事態の不可変性」を含意し、この含意が文脈を基盤として情意的意味の推論につながることが図において示されている。もうひとつは、情意的意味の慣習化プロセスである。構文の使用頻度が高まることによって、情意的意味の発生メカニズムが徐々に簡略化され、構文の意味として慣習化への道程を辿ることが示されている。

本研究では、通時的・共時的観点より、上図で想定される情意的意味の発生メカニズムと慣習化プロセスの妥当性を示すことである。それゆえ、以下の３つの研究ステージを想定する。

(1) 研究ステージ[1] 想定される情意的意味の発生メカニズムの妥当性（共時的分析）：上図に示したように、両構文の結果指向性に含意される「事態の不可変性」が情意的意味推論の基盤となっていることを、主に共時的観点からの分析によって明らかにする。

(2) 研究ステージ[2] 想定される情意的意味の慣習化プロセスの妥当性（通時的分析）：使用頻度が高まることにより、推論によって生じる情意的意味が構文の意味として組み込まれていくという慣習化プロセスの妥当性を、通時的観点からの分析によって明らかにする。

(3) 研究ステージ[3] 結果指向性と情意的意味の関連性に関する言語一般性の検証：結果指向性をもつ（他言語を含む）他構文に情意的意味が発生しうるかについて、その可能性を検証する。そして、他構文においても結果指向性と情意的意味の関係が確認されれば、本研究の妥当性の強力な裏付けとなる。

３．研究の方法
本研究は以下の３つのフェイズを設定して、計画対応するものである。

(1) フェイズ１：情意的意味の発生メカニズムの妥当性の検討（共時的分析）：共時的分析によって、Get 受動文と「てしまう」構文について、情意的意味の発生が、両構文の共有する「不可変性」を基盤とし、推論によっ

て具体化されるという発生メカニズムの妥当性を検討する。

(2) フェイズ２：情意的意味の慣習化プロセスの妥当性の証明（通時的分析）：通時的分析を行い、両構文における情意的意味の発生時期の特定と使用頻度の変遷を分析し、想定される慣習化プロセスの妥当性を証明する。

(3) フェイズ３：結果指向性と情意的意味の関連性に関する言語一般性の検証：英語の Hot News Perfect(e.g. The train station has burned to the ground!)などの結果指向性をもつ構文や、他言語の結果指向構文に注目し、構文の結果指向性と情意的意味発生における関係の言語一般性を検証する。

４．研究成果

上記の３つのフェイズを通して、英語の Get 受動文と日本語の「てしまう」構文にみられる情意的意味の発生メカニズムが明らかになった。

動詞 get は起動動詞であり、事態の開始あるいは終結に焦点を当てるという潜在性をもつ。過去時制で使用されると、ある状態変化の終結、すなわち結果状態に強い焦点を当てることになる。このようなアスペクト的な性質は Get 受動文にも継承されていると考えられ、Get 受動文によって記述される事態は結果状態への強い焦点化が認められる。それゆえに、「取り戻すことができない」という過去の事態の不可変性という話者の意識が張り付きやすくなるのである。

また、補助動詞「てしまう」については、特に通時的観点からの分析も取り入れた。補助動詞「てしまう」は、動詞「しまう」と決して無関係ではなく、本動詞としての意味を継承していると考えられる。特に、物事を片付ける、終わりにする、という意味は補助動詞化しても残っており、これが補助動詞「てしまう」の結果指向性に深く関わっているのだと言える。例えば、補助動詞「てしまう」は「紙を燃やしてしまったが、燃えなかった」と後続文にてキャンセルすることからもわかるように、事態が実際に発生したこととその結果状態に強い焦点を当てる。このような意味をもつがゆえに、Get 受動文と同様に「不可変性」の含意につながるのだと結論付けられる。

このように両構文は全く異なる形式の構文であるにもかかわらず、「不可変性」という共通する意味性質を有している。ただし、この「不可変性」は文脈によって発現しうるものであり、常に保証されるものではない。多くの場合には、文脈が話者にとって否定的なものである場合に、この「不可変性」の含意が構文の情意的意味として表出されることになるのである。

すなわち、情意的意味は動詞自体の意味に根ざした（補助動詞「てしまう」の場合には、動詞「しまう」）結果指向性がゆえに、取り返すことができないという「不可変性」の含意を生み出す。これが話者にとって否定的な文脈では強い感情の形をとって表出されるというメカニズムを想定することができる。

本研究は、これまでほとんど注目されることのなかった英語の Get 受動文と補助動詞「てしまう」構文に共通する意味に着目した。特に他言語間構文の比較対照分析は、多くの場合、形式的類似性に基づいて行われるが、このように、一見、形式的にも意味的にも関連性のないと考えられる構文間に共通点を見出し、比較対照分析を行う手法は、今後の（他言語間を含む）構文研究に適用可能な斬新なアプローチであり、独創的であると言えよう。

ただし、今回の研究では、特にフェイズ(3)「結果指向性と情意的意味の関連性に関する言語一般性の検証」が不十分であったと言わざるをえない。予測としては、英語の Hot News Perfect 等の結果指向構文にみられる情意的意味の発生も、今回の研究で明らかになったメカニズムと同様であると考えられる。この点については課題とし、今回の研究を基盤とした今後の研究の中で明らかにしていくつもりである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 田村敏広 (2013)「言語のアスペクト的性質を基盤とした話者の感情表出 -日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文を例に-」静岡大学教育研究第 9 号, pp.1-10. （査読あり）

〔図書〕（計 2 件）

(1) 田村敏広 (2015)「補助動詞「(て) しまう」と感嘆詞「しまった」の意味分析と拡張メカニズムの考察」『認知言語学論考 12』(編)山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎, pp.337-378, ひつじ書房.（査読なし）

(2) 田村敏広 (2015)「補助動詞「てしまう」における「不可逆性」の意味基盤」『言語研究の視座』(編)深田智・西田光一・田村敏広, pp.280-292, 開拓社（査読なし）

６．研究組織

(1)研究代表者

田村 敏広　(Toshihiro Tamura)
静岡大学大学院情報学研究科・准教授
研究者番号：90547001